

# 狼の一本眉毛

福頼・御内谷

絵：野口宣友

むかし昔々そのまた昔。現在の南部町福頼が経乗院村と呼ばれていた頃のこと。大変体の弱い男がいて、何を食べても美味しくない、生きていてもしょうがない、いっそのこと赤谷辺りに出る狼に喰われて死んでしまったほうが良いと、ある時赤谷の山奥深く入って行きました。

真夜中になると、ペロリと長い舌を出して3匹の狼がやってきました。男は「さあ！わしを早く喰ってこいしない」お願いするように手をあわせました。だが、狼は喰おうとは

「『本当の人間』か『そうでない』かをどうして見分けるのだ！」

狼は言いました。「それは、この『眉毛』で見たらわかるんじや！ワシの『眉毛』を一本抜いてやるから山を下りろ！これさえ持っていれば、『しあわせ』になれる」雌の狼も言いました。「この世には、山川草木一つ一つにも、そなたが生きる『居場所』があるのです」そして、3匹の狼は声を揃えて言いました。

「命は一つしかない。命は大切にしろ」

あくる日、男は家に戻り、長寿寺（落合）のお坊さんを訪ねました。やさしい笑顔でお坊さんは「伯耆十三礼所・観音霊場」の巡拝を勧め



ました。翌々日、男はお上人様に見送られて経乗院村をあとにしました。あるところで、一軒の家に立ち寄って一晩泊めてほしいと頼むと、その家のおじいさんは快く泊めてくれようとしたのに、おばあさんが出てきて、つれなく断りました。男は「眉毛」を試してみようと取り出して目にあてると、おばあさんの姿は「牛」に見え、おじいさんは「本当の人間」に見えました。

「これは面白いヤ」とその男は「眉毛」を目にあてて人間を見ていると、体は人間でも首から上が犬だったり、猫だったり、鶏だったり、今さらな

から本当の人間はめったにいるものではないとわかりました。しかし、巡礼をするうちに、この一本眉毛で見えるものは狼夫婦が言ったとおり「みんな同じ人間だ。同じ人間とつきあいをしたので、心が安らぎ、幸せな心になったのだ」そう思いはじめました。こうして巡礼をしながら、男は一番礼所金龍山雲光寺の山門をくぐりました。

お上人様は温かく出迎えてもてなし、今までの出来事に「うん…うん」と耳を傾けてくださいました。あの病弱な男が、美味しそうにおかわりして、食べることにありがたさ、美味しさを知りました。お上人様は言いました。「狼は、『大口の真神』といわれて尊崇を集めている動物です。狼がくれた『一本眉毛』の威力こそ、この世に生きるあかしの『呪宝』なのですよ」

「本当だ！生きることでって本当に素晴らしい！」男は心から嬉しそうにそう叫びました。「人と人との出会いが、また人をつくります。ああ善き哉人生」

おしまい